

手取川上流域におけるツキノワグマの狩猟形態とその変化

水野 昭憲 石川県白山自然保護センター
花井 正光 文化庁記念物課

BEAR HUNTING IN THE HAKUSAN REGION

Akinori MIZUNO, *Hakusan Nature Conservation Center, Ishikawa*

Masamitsu HANAI, *Cultural Properties Protection Dept., Agency for Cultural Affairs*

石川県の手取川上流域、白山山麓では、残雪期に巻狩りによるクマ猟が古くから行なわれてきた。この地域は、日本でも有数の多雪地であって、全般に起伏量の多い山地である。このため冬期間は雪崩が多発し、法令で定められている狩猟期間中のクマ猟は危険でもあり、雪がよくしまる残雪期のクマ猟が主体となっている。

白山地域におけるクマ猟は、古くからの形態を基本として今日も継承してきてはいるが、近年の主として林道開設による道路事情の変化や使用銃器の変化に応じて、少しずつその形態は変わってきている。

ツキノワグマは全国的に主要な狩猟獣であるとともに、他方では、クマ剥ぎと称される林業被害、果樹などの農作物被害、まれに発生する人身被害などを理由に有害獣とされ、その駆除捕獲が広く実施されている。狩猟および有害獣駆除によるツキノワグマの捕獲は、当該地域のクマの分布や密度のほか、自然環境の改変状況や土地の利用形態などを因子とする相互関係のもとで決定されるものであるから、捕獲圧は地方によって著しく異なっているであろう。クマの生態学的側面とともに、ヒトの係り方も重要な要素であるとなさなければならない。ツキノワグマの保護管理を計画しようとする際に見過してはならない点である。

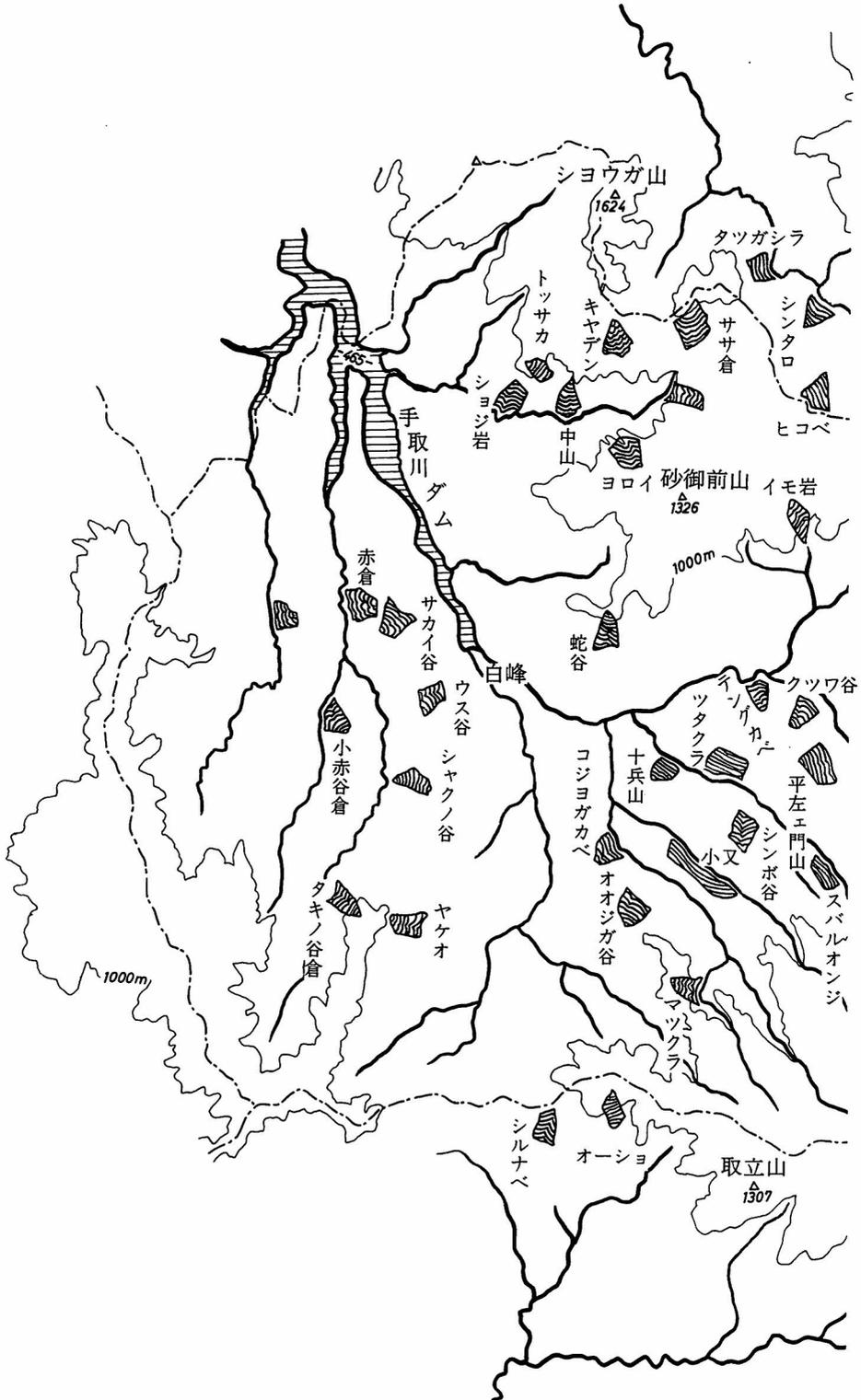
ここでは、白山山麓のクマ猟について、その形態と近年の変化をとりまとめ報告する。

組編成による巻狩り

手取川上流域の伝統的なクマ猟には、通常村落単位で猟師組が編成されている。古くは市ノ瀬・牛首・桑島・尾添・中宮・瀬波に組があった。それぞれの組は、各村落に在住する猟師で構成され、その村落の範囲を猟場として行動していたが、一回の猟に必要な人数の関係で、隣接する組の間で合同や相手方領域での猟も頻繁に行なわれた。ときには、尾根を越えて岐阜県や福井県までも足を伸ばすグループもあったことが知られている（千葉 1972）。

古い猟組織の中に、白山山麓に特徴的なもので「クミモト（組元）」又は「シコミヌシ（仕込主）」と呼ばれていたものがあった。これは、村にいる資本のある者が必要な物資を提供して猟師組を組織し、獲物の一部の配分を受けたり、獲物の商品化を手伝ったりした。この組織があったことがはっきりしているのは、市ノ瀬、牛首、尾添、中宮である。小右衛門組（市ノ瀬）、十郎右衛門組（牛首）など

本報告の一部は、環境庁より委託された「森林環境の変化と大型野生動物の生息動態に関する基礎的研究」によった。



資金を提供する者の名を組の名とした(千葉 1977)。明治後期が大正年間までは続いていたといわれる。

クマ猟に特定の猟師による組が形成されるのは、残雪期におこなう巻狩りでは、領域の地形をよく知った猟師とそのチームワークが要求されるからに他ならない。このような白山山麓にみられるクマの巻狩りの形態は、共同狩猟形態としての東北地方の「マタギ」のクマ猟とよく似ている。

よく狩りが行なわれる猟場を、本来岩場を意味する「クラ(倉)」と呼び、個々のクラには名称がつけられている。クラとなる場所は、急斜面の岩場で上部は一つの尾根に連らなっていることが多い。クラ内の植生はブナを優占種とする落葉広葉樹林を主体とするほか、ヒノキ、クロベ、ヒメコマツなどの針葉樹林をパッチ状に含むことが多い。また雪崩により形成される草地(いわゆる高茎草原)が含まれることもある。白峰村猟友会の左屏公一氏により作成されたクラの分布と名称は図1のとおりである。多くのクラは標高600mから1,600mの範囲にあることがわかる。また村落周辺には少なく、亜高山帯以上にもみられない。これらのことから、クマの冬ごもりと残雪期の採食地がその範囲にあることを反映しているものと考えてよい。クラは越冬から春にかけてのクマの生態とも密接に関連しているけれども、ここではクラの一般的な形状を述べるにとどめておいて、白山ろくの広い範囲のクラの分布と地形、植生等、クマの生息環境としての分析は別の機会にゆずる。

巻 狩 り 体 制

巻狩りは5人から10人の規模で実施される。クラの地形によって変化はあるが、基本的には尾根に射ち手が立って、谷から勢子がクマを向い上げる形で行なわれる。射ち手と勢子はそれぞれ持ち場によって名称がつけられていて、尾添川ぞいの中宮・尾添と牛首川ぞいの桑島(現在は猟のグループはない)・白峰とで名称は多少異なっている(図2)。各持ち場の配分と配置を決めるのには、パーティ

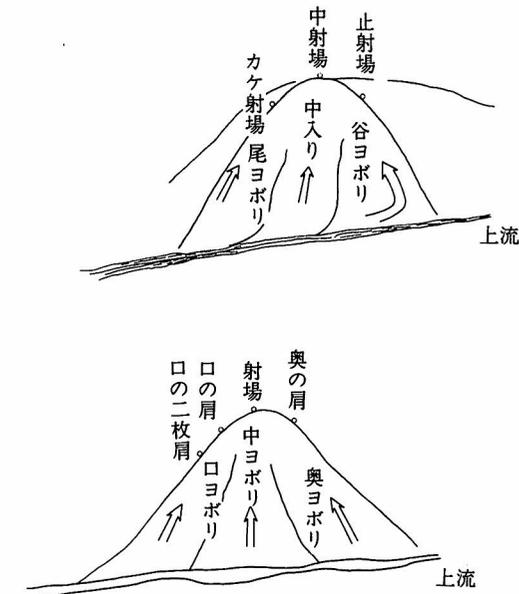


図2 白山ろくの基本的クマ巻き狩体制
上：白峰 下：尾添

の最年長者あるいは最も経験の豊かな者があたる。中央の射ち場には通常、経験が豊かな腕のたつ者が配される。地形によって、また参加人数によって、射場の配置は一定でなく 50 m~100 m 間隔で 2 人から 5 人が並ぶ。勢子には足の強い者があたり、経験の浅い者はわきの方の勢子に回ることが多い。クラのほとんどは急峻な斜面であるため、勢子は小谷（この地方でノマと呼ぶ）を登ることは困難で、できる限り大声を出して小尾根を登っていく。クマは下方から人の声があるとゆっくりと斜面を主尾根に向って登っていく習性があり、射場へ追い上げられる。巻狩りに要する時間はクラの規模によってまちまちであるが、大きなクラの場合は 2 時間以上かかることもある。クマと勢子の動きを追跡するために、谷をはさんだ向い斜面に 1 名見はりを立てることもあり、これを「向いだち」という。

以上はもっとも普通の巻狩りの形態であるが、人数や地形上の制約があって効果的に巻きをかけられない時には、斜面に対し横方向へクマを追う場合（ヨコマキまたはヨコボイ）や谷へ追い降ろす場合（サカボイ）もある。このほか谷をはさんだ向い斜面で距離が近い地形では勢子をかけずに接近して射つ場合（ムカイウチ）もある。通常、クマがクラの中にいることを目撃または足跡により確認してから巻狩りが開始されるが、クマを探すのに適したクマンバと呼ばれる見透しのきく特定の場所が設定されている。午前中にクマを発見した場合には直ちに猟が始まるが、午後に発見した時は翌朝に巻



図 3 マタギまたは巻狩りによるツキノワグマが記録されている市町村の分布。文化庁文化財保護部(1973)、千葉(1975)、武藤(1977)、丸山ほか(1978)、太田(1979)、白日社(1979)などにより作成。

きをかけることも少なくない。また、クマがいることを確認していなくとも、毎年クマが入っている可能性が高いか、あるいは対岸から見えにくいクラを巻くこともあり、メッタマキと言っている。

白山山麓における、以上の巻狩り形態は、部署の名称等は異なるものの、秋田県や山形県下の奥羽山系や羽越山系で広く行なわれてきたマタギによるクマの共同狩猟の形態と酷似している。東北地方のマタギの猟法でもっとも普通の形態である、斜面の下から勢子によってクマを追い上げる巻狩りは、岐阜県奥美濃地方で「タテマキ（縦巻）」と呼ぶがほとんど用いられていないという（東 1978）。本格的な巻狩りの伝統を引き継いでいるのは白山山系が西限とみることができよう（図3）。

狩の道具や、猟師の移動のしかたは、長い間に少しずつ変化してきた。銃については、古くは火縄銃またはカンヅツと呼ばれているものが使われた時代もあった。1910年頃からは村田銃が、1940年頃からは散弾銃が使用されてきた。1960年代には、いろいろな道具が急激に変化をみせている。クマ猟にそれまで主流であった村田銃や散弾銃にかわり初めてライフルが使われたのは1964年で、それ以後急激に村田銃からライフルへと替った。トランシーバーと双眼鏡の導入も1965年頃であり、猟の効率は急に良くなったと考えてよい。1965年頃からは、白峰から奥の牛首川ぞいに、また、中宮、尾添からの奥の尾添川ぞいに林道の開設が進み、それに合わせて猟師間に自動車普及したため、入れるところまで自動車で乗りつけて入山するようになった。この傾向は残雪期に早めに道路の除雪にとりかかるようになった1970年代からはますます奥へ行くようになった。これによって過去の山中で宿泊しながら行うことの多かったクマ猟は日帰り中心の狩猟へと変化した。

その他の猟法

手取川上流域のクマ猟には、犬は全く使用されない。巻狩りと平行して、古くは、槍を持ってクマの越冬穴へ入ることも行なわれた。白峰村市ノ瀬には槍猟の名人もいたと伝えられる。銃が旧式の時代には、銃が不発の際の予備としても槍が持ち歩かれていた。飼養ミツバチやカキ・クリを求めて人里近くへ出てくるクマに対しては、ハサミワナ（ガンバサミ）が使用されたこともある。また、穴の前などに「ベタオトシ」という大規模な押しつぶしワナを仕掛けたことも伝えられているが、これらの猟法は現在では、法律による規制の関係もあって全く使用されていない。人里近くのカキやクリの木に来るクマに対して、決して登る木の途中に「ククリワナ」を仕掛けることがあり、この方法は現在でも、小松市や福井県内等でまれに用いられている。

捕獲物の処理

獲物の商品化についてみると、古くからクマの皮と胆のう（クマノイ）は換金商品として扱われていた。しかし、特に決った流通ルートがあるわけではなく、知人等を通じての要求に応じてさばかれていて、現在に至っている。皮は冬から春にかけての冬毛が良質とされ、胆のうも越冬の終期に大きくなることから、冬から春のクマにより高い価値が認められており、このことが残雪期に狩猟が定着した一つの要因でもあった。

肉は、昔から猟師間あるいは村落内でいわゆる自家消費されてきたが、1970年頃に白山山麓の観光開発が急成長するようになって、山の名物として旅館等からの需要が伸び、商品として売買されるようになった。これより以前、1950年代に市ノ瀬でクマの缶詰が製造販売されたこともあるが、一時的で量も少ないものであった（白峰村1962）。1970年頃から白峰で缶詰が本格的に製造販売されるようになった。この頃から、クマ肉が近隣地域からも価格の高い石川県へ流入するようになり、缶詰ある

いは生肉で旅館やみやげもの店で売られるようになった。古くからクマ猟の盛んな栃木県北部地域においても、猟具の変化、獣肉の自家消費から商品化へと、さらに他地域からの肉の流通等、白山山麓で進行した変化が、ほぼ同時期に起ったことが報告されている（丸山ほか 1978）。

近年の狩猟動向

石川県内でも、比較的積雪量が少なく、根雪になる時期も遅く、また地形がゆるやかな起伏の、小松市・加賀市・江沼郡の山間部（小松林業事務所管内）では一般の猟期である 11 月 15 日から 2 月 15 日までの期間に、小人数あるいは個人による猟が行なわれている。石川県内のクマの分布地を持つ、小松、鶴来、金沢の各林業事務所別の猟期及び猟期外の有害鳥獣駆除における捕獲頭数は表 1 のとおりである。手取川上流域は鶴来林業事務所が管轄しており、そこでは圧倒的に猟期外の捕獲頭数が多く、このほとんどは 4 月から 5 月の残雪期のものである。この地域では、12 月上旬にはクマの分布地である山間部へ入ることが雪ではばまれるため、冬期間の猟期には偶然に村や道路近くへ出沒した場合を除いて、隊を組んでクマ猟に出かけることはほとんどない。

表 1 石川県における所轄管内別ツキノワグマ捕獲頭数
(石川県自然保護課統計資料による)

林業事務所 狩猟・有害鳥獣駆除	鶴来 猟期	小松 駆除	金沢 猟期	全 駆除	県 駆除			
1975 年	1	21	4	5	1	9	6	35
76	2	15	11	1	5	3	21	19
77	1	20	17	21	3	1	25	42
78	2	27	10	6	4	9	18	42
79	1	16	14	2	4	1	20	19
80	0	43	10	1	2	12	13	56
81	2	38	19	0	1	10	22	48

近年の猟組織は、一般の狩猟期間外であるため、有害鳥獣駆除隊として組織されている。それでも、つい最近までは伝統的な組編成や領域を踏襲してきたが、1970 年代になって、有害鳥獣捕獲許可と報告に、より強い行政指導が行なわれるようになった。1979 年 4 月からは駆除隊の編成と区域は、明確に町村の行政区域単位に再編成され、町村長の提出する鳥獣捕獲許可申請に対し、同町村長に許可証が交付され、ハンターには駆除隊の従事者証が渡される形態に変わった。

前述の村落単位の組のうち、市ノ瀬にあったものは過疎や移住によって牛首に吸収されたのが 1935 年頃である。また、桑島に存在した組は手取川ダムによる湛水で、ほとんどが離村したため、残る一部が牛首に合流した。近年の石川郡吉野谷村、尾口村、白峰村におけるクマ猟のパーティ編成の変化は図 4 のとおりである。

この地域全般にわたって、1970 年代以降、過疎が進み、現金収入の仕事や定職に就いて休日にしか出猟できない者が増えたことも手伝って、後継者が少なくなり、猟師の老令化、さらに経験豊かなハンターの減少がみられる。白山ろくの鶴来町、河内村、鳥越村、吉野谷村、尾口村、白峰村で、残雪期のクマ猟に参加した人数を有害鳥獣捕獲許可証の数からとりまとめると表 2 のようになる。また、狩猟期間つまり捕獲許可の期間は 1970 年頃までは 3 月から 6 月までといった長期のこともあったが、近年は行政指導によりしばられてきており、通常 4 月上旬から 5 月中旬までとなっている（表 3）。

なお、クマ猟に実際に出動した日数は、その年の天候や残雪の情況により、年々大きく異なってきた

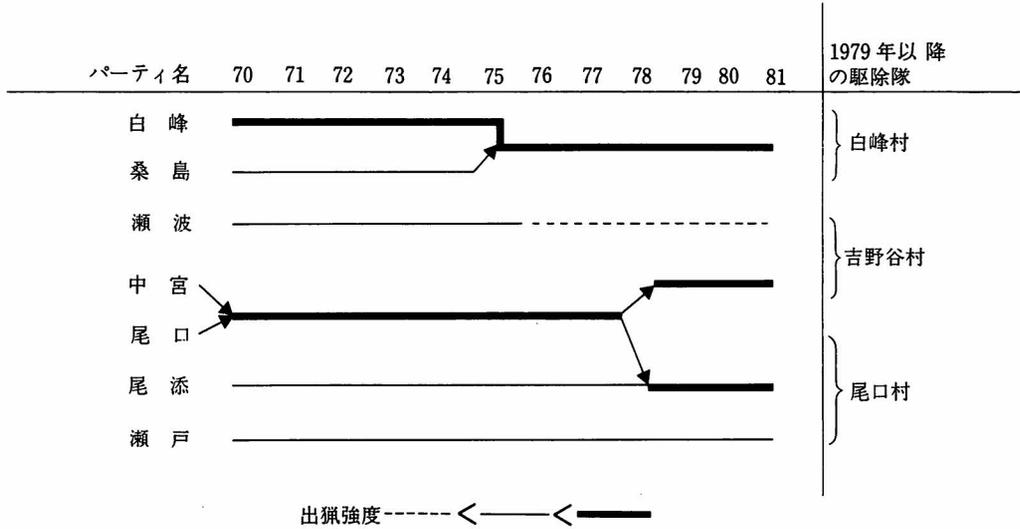


図4 白山ろく3か村におけるクマ猟パーティおよび出猟強度の変遷

表2 鶴来林業事務所管内における春季のクマの有害鳥獣駆除隊員数の変遷
(鶴来林業事務所の統計による)

	鶴来町	河内村	鳥越村	吉野谷村	尾口村	白峰村	計	備 考
	人	人	人	人	人	人		
1967	なし	5	6	10	15	16		} 一部資料不完全
68	2	5	3	10	16	27		
1973	なし	9	5	15	30	25	84	
74	9	10	14	16	28	24	101	} 74. 11 手取川ダム着工 離村始まる
75	9	12	16	15	29	21	102	
76	11	12	11	14	22	17	87	
77	13	13	12	14	20	16	88	
78	11	11	6	13	22	17	80	
79	11	11	7	14	23	15	81	} 79. 4 町村長の申請に変わる
80	11	8	7	16	28	15	85	
81	13	10	11	14	26	15	89	
82	10	10	11	13	24	14	82	

表3 経年的にみた白山麓におけるツキノワグマ
猟の期日

年度	出猟初日	出猟最終日	期間日数
1970	4. 8	5. 10	33
1971	4. 1	5. 14	44
1972	4. 1	5. 5	35
1973	4. 1	5. 8	38
1974	4. 10	5. 14	35
1975	4. 10	5. 14	35
1976	4. 4	5. 19	46
1977	4. 1	5. 18	48
1978	4. 10	5. 21	42
1979	4. 10	5. 22	43
1980	4. 11	5. 20	40
1981	4. 11	5. 10	30
平均	4. 7	5. 15	39

ているが、のべ出猟日数を捕獲努力量という考え、各グループの日誌などからまとめてみると、図5のようになる。定職に就いた猟師は、土、日曜くらいにしか出られないということもあって、のべ出猟日数は頭うち、または減少の傾向にあるといえる。

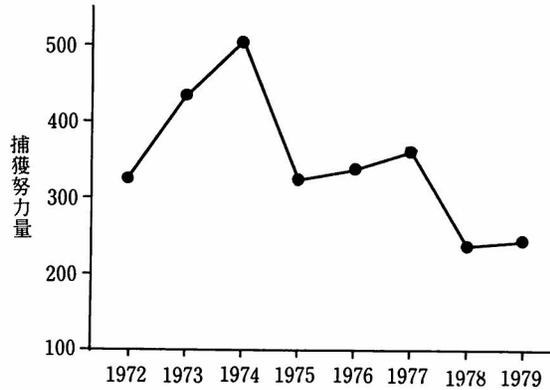


図5 捕獲努力量 (のべ出猟日数) の経年変化

現状と課題

手取川上流域におけるクマの狩猟形態とその変化および近年の有害鳥獣駆除の現状について述べてきた。ここで、今後クマの保護管理を考える際深いかかわりをもつと思われる狩猟形態について少し言及しておく。

白山のクマ猟は伝統的なものであり、現在も基本的にはその方法が引き継がれている。近年、ライフル、トランシーバー、双眼鏡などが導入され、効率は大幅に改良されてきた反面、長年クマ猟に従事してきた熟練ハンターが高齢化や社会的変化により減少してきている。またクマ猟による収入を期待しているハンターも減り、全体としてスポーツ・ハンティングの性格へと移行する傾向がある。

森下・水野(1970)は石川郡吉野谷村・尾口村・白峰村の3か村での1962年から69年までの捕獲頭数の変動から、この地域のクマの生息個体数は平衡状態を維持していると推察した。毎年捕獲努力量と捕獲数の関係や猟師の観察などを総合的に考えると、その後この推察結果を大きく逸脱する傾向は認められない。また前述の如く捕獲努力量が全体として減少傾向をみせていることから、今後捕獲頭数が大幅に増加することはないものと予想される。

東海地方、紀伊半島、近畿、中四国で大きな問題となっているクマが人工植栽の針葉樹の樹皮を剥ぐ、いわゆるクマハギの被害(静岡県林業試験場1978, WATANABE 1980)は手取川上流域ではほとんど見られない。しかしながら、石川県下でも毎年何件かのクマによる人身被害や人里への出没が報告されている。東海地方で1970年頃から使われ出したクマ用の鉄製捕獲檻は、効率が良くとされ、近年全国的に普及している。石川県下でも有害獣駆除の目的で一部市町村で使用されているが、伝統的な狩猟形態を継承している白山麓地方では檻が使用されることはない。

クマが人間にとって有害な側面を持つ限り人間居住地近辺でのクマによる被害に対して、保護管理の観点からも何等かの措置が必要とされよう。その場合、クマの生息数のコントロールを一手段にせざるを得ないことも多いであろうが、その際には、当該地域のツキノワグマについての生態学的特性を把握するとともに、地域社会におけるクマに対する評価や狩猟獣としての歴史など、社会的要素を

も加味したうえで、捕獲の適正規模や捕獲方法の検討がなされなければならないであろう。

文 献

- 東 滋 (1978) 奥美濃のクマとクマ猟, 日本の歴史的な環境としての哺乳類 (文部省「環境科学」特別研究), 58~66
文化庁文化財保護部 (編) (1973) 狩猟習俗 I, 214 pp., 国土地理協会発行
千葉徳爾 (1972) 手取川上流における狩猟者の組織とその活動, 白山資源調査事業 68-69, 石川県
—— (1975) 続狩猟伝承研究, 590 pp., 風間書房,
—— (1977) 現代日本列島に行なわれる狩猟伝承の諸相, 狩猟伝承研究 (後篇) 150~155, 風間書房,
白日社 (編) (1979) 山と猟師とケモノたち 245 pp., 白日社.
丸山直樹・古林賢恒・岩野泰三・黒田伸郎 (1978) 栃木県北部におけるシカ・ツキノワグマの生息状況と大物猟の動向,
生物科学 30 (4); 215-225.
森下正明・水野昭憲 (1970) ニホンツキノワグマの習性と個体数推定, 石川県発行「白山の自然」; 322-329.
武藤鉄城 (1977) 秋田マタギ聞書, 222 pp., 慶友社.
太田雄治 (1979) 消えゆく山人の記録 マタギ, 314 pp., 翠楊社.
白峰村 (1962) 工業の消長, 白峰村史上巻 159-199.
静岡県林業試験場 (1978) 静岡県におけるサル, クマ, イノシシ, シカ, カモシカの分布と被害の現況, 静岡県林業試験
場研究調査資料第 21 号.
WATANABE, H. (1980) Damage to conifers by Japanese black bear, *Bears—their biology and management*, U.
S. Government Printing Office, Washington.

SUMMARY

In Hakusan region, black bear has been hunted by means of traditional grand hunt, which five to ten hunters encircle a mountain slope. This system is suited only to the snowy area and very similar to the method of the "Matagi" hunters living in the mountains of Tohoku district. The bear hunting in our region is done mainly in the early spring for the purpose of control of the nuisance bear, while few are hunted in the legal hunting season. Since 1960's, rifle, binoculars and handy transceiver were introduced to the field and the hunting style has been changing slowly. The gall used as a local medicine and the fur have been sold from old time. The bear meat become an article of commerce recently as a local speciality with the development of tourism in the mountain area. The professional hunters are decreasing these days because of their engagement in regular occupations and of advanced age. The hunting of this area now shows a tendency of sports hunting.